

心に染みる言葉(9) 貴志謙介さん

自民党の裏金問題が連日報じられています。でも、何十億もの裏金を何に使ってきたのか、メディアも触れず、闇の中です。飲み食いや贅沢・・・脱税も許される上級国民？ 大臣にしてもらう上納金・・・まるでヤクザ社会か？ でも、本丸は、河井案里事件でも発覚した通り、選挙の買収にあるようです。自民党が選挙で強いのは、裏金の威力と宗教票なのであって、元々フェアな選挙ではなかった？ こんな詐欺まがいのことが30年も続いてきた？

裏金問題では政治倫理審査会で出席した議員の追及が続いていますが、僕自身、この底の抜けた犯罪的組織に対して、何か既視感がありました。本棚を探すと、貴志謙介さんの名著「戦後ゼロ年・・・」が見つかりました。NHK ディレクターだった著者が2017年に「戦後ゼロ年東京ブラックホール 1945-1946」を制作、NHK スペシャルとして放送されました。



<https://youtu.be/G8LQ8opSytk?si=pXyK3n01QUKB21Jj>

これまで語られることのなかった終戦の闇に切り込んだドキュメンタリーとして高評価され、出版されたものでした。裏金に関連して、印象に残っている記述をいくつか拾い出してみます。

(第3章 隠匿に狂奔するエリート)

* 東京湾で見つかった大量の金塊(1946年4月)

大量の金塊は日本軍の隠匿物資の一部だった。元は本土決戦のために軍がかき集めた国民の財産だ。・・・占領軍上陸の前に「処理」せよとの鈴木貴太郎総理通達が出た。但し、お裾分けに預かれたのは、軍人やエリートなど戦争指導者だけ。・・・国民が敗戦に呆然と立ち尽くしている間に、軍人やエリートは利権確保でフル稼働していた。

* 隠匿物質の行方(GHQ コーエン顧問の手記)

軍人やエリートによる隠匿物資の横領、その額は現在価値で数兆円！ 敗戦で弱体化していた旧支配層が息を吹き返し、資金は闇市場を通じて政治家にも還流した。それが政官財の腐敗構造を生んだ。その仕組みと人脈は戦後社会に組み込まれ、長く生きのびた。

さらに、本書では、自民党のルーツにまで踏み込んでいます。日中戦争中、右翼テロリストの児玉誉士夫が上海特務機関で中国人から強奪したトラック2台分の金、プラチナ、ダイヤなど莫大な資産は終戦のどさくさに紛れて日本に持ち込まれ、軍の隠匿物資と同様、闇市場に消えました。そして、GHQの方針変更でA級戦犯容疑の児玉や笹川良一、岸信介が巣鴨プリズンから釈放された後、自民党の前身である自由党の設立資金となったそうです。

自民党の金権政治は、今回の**裏金**問題が最初ではなく、終戦直後の昭電疑獄や造船疑獄、田中角栄のロッキード事件、金丸信の佐川急便事件等と幾度も繰り返されてきたことは周知の通りです。そして、そもそものルーツは、貴志さんの著書が暴く通り、戦後ゼロ年の軍の隠匿物資や上海特務機関由来の**裏金**にあった、つまり、「三つ子の魂、百まで」ということだと思えます。

ただ、今回の**裏金**騒動を契機に、「今だけ、カネだけ、自分だけ」といった拝金主義の政治には、さすがに終焉の足音が聞こえてきているような 気がします。いささか楽観的過ぎるかも知れませんが・・・

今回の**裏金**問題は政府公開資料に対する赤旗日曜版の記者の血のにじむような地道な分析に基づいて、神戸学院大の上脇博之教授が告発したものです。行政データの公開が進む中、行政の可視化は早晚不可避となり、政治家が公民権停止、つまり政治生命のリスクを犯してまで**裏金マネーロンダリング**や**中抜き**を追い求めることは、もはや割が合わなくなっているからです。これまで頼りにしていた**裏金**による買収票と統一教会の宗教票が目減りしていけば、さすがの自民党も利権求心力を失っていくかも知れませんね。



(竹の台 西元)